

プロジェクト成果を「情報システム社会環境研究会」で発表

—ネットワーク情報学部の三船真哲くんから体験記—



▲左から三船くん、小坂くん、山田くん

ネットワーク情報学部の三船真哲、小坂慶和、澤津健吾、山田嶺くんが取り組んだ「プロジェクト1」の研究成果を、3月23日に神田キャンパスで行われた(社)情報処理学会の研究会で発表した(澤津君は欠席)。企業人に交じって論旨を明確に述べ、高い評価を得た三船くんから体験記が寄せられた。

社会的要求満たすアイデア それを実現する技術を提案

私たちは「P2P技術を利用したアンケート集計システムの提案」というテーマのもと、汎用的なアンケート集計システムを構築しました。本システムは、アンケート実施を通じたコミュニケーションを目的とし、さまざまな技術的配慮をすることで、世に広く認知されているP2Pシステムに見られる違法性を払拭しています。また、P2P本来のメリットである負荷の分散と自律型ネットワークの形成も実現しています。プロジェクトは、システムの仕様定義から、実装、機能評価までを1年を通して行ってきました。特に仕様定義の段階では、システムの社会的有用性についての議論に多くの時間を費やしました。当初、学会発表は念頭に置いていなかったため、戸惑いはありましたが、仲間と準備を進め、終えることが出来ました。資料準備や数多くの論議を通じて、これまでITを提供することだけを考えていた私は、社会的要求まで把握する力を身につけることが出来たと思います。特に研究に求められる新規性を今回のテーマが満たしているかなど、テーマを研究という視点から見直すことが出来たのは良い経験でした。今後も社会的要求を満たすアイデアと、それを実現する技術の双方を提案していければ、と思っています。

指導の綿貫理明教授は「プロジェクトは、単位修得を目的とするのではなく、成果が何らかの形で社会に役立つことを考えるよう方向付けをしましたが、後は学生たちがブレーンストーミングによってテーマを絞り、研究を進めました。企業研修科目(インターンシップ)に参加させ、実際の開発を体験したことでさらに『力』がついたようです。三船くんは質問にも的確に答え、私たちの学部教育のPRIにも一役買ってくれました」と話している。

【ニュース専修5月号14面】

WAKUWAKUときめき専修21

今年『自分を磨く』
 テーマごと2回完結

就職課が開催する「WAKUWAKUときめき専修21」が生田キャンパスで開講されている。今年「Brush UPゼミナール—自分を磨く」と題し、テーマごとの2回完結方式で、グループディスカッションとプレゼンテーションを行う、双方向性の講座を行っている。

講師：芝原脩次氏（わくわくヒューマンカンパニー代表取締役）

時間：毎週火曜日4時限（14:40～16:10）

場所：生田キャンパス436教室

※ 今後の日程は下表の通り。

WAKUWAKUときめき専修21 「Brush UPゼミナール—自分を磨く」



▲「イマガクフェスタ」の説明会（右が埵代表）

日程	テーマ
5月25日	VISIONARY COMPANY
6月1日	魅力ある組織・魅力ある人材
6月8日	働くこと 素敵な生き方・格好いい働き方
6月15日	人生を戦い抜いていく力
6月22日	大学生生活の課題
6月29日	フォローアップ・ワークショップ
7月6日	

6月20日に「イマガクフェスタ」

同講座の入門編で、学生が主催する「イマガクフェスタ」が6月20日（日）、生田430号教室で開催される。この企画は10分間で自分の“イタイコト”“主張”を自由に述べるコンテストで、専大生なら個人・団体を問わず参加出来る。最優秀賞には賞金5万円。イベントを主催する埵雄一郎くん（法3）は「自分の主張を発信する機会には限られていますが、それぞれ話したいことはあると思います。そういった“イタイコト”を自由に表現してほしい」と参加を呼びかけている。

申し込み締め切りは6月2日（水）。問い合わせは就職課窓口、またはEメール=j140845@isc.senshu-u.ac.jpまで。5月25日、6月1日の3、4時限目には生田432号教室で説明会も開催。

【ニュース専修5月号14面】

「英語力をつける読書ガイド」(第1回)

「青い表紙の本」 田邊祐司(文学部教授)

このコラムでは、本と読み手との間の「物語」を中心にした読書ガイドをお届けします。
第1回は「青い表紙の本」。

筆者が大学に入ったのはふた昔も前。「とりあえず英語はやらなきゃ！」という思いから英語サークルに入部しましたが、それでも英語の「何を?」「どう?」は、分からずのまま。転機が訪れたのが夏休み前のコンパで、英語ディベート全国大会で優勝した5年生の話聞いたときでした。彼の英語の骨格となったのが、青い表紙の『アメリカ口語教本(中級)』(W.L.Clark著、研究社、通称『アメロ』)のあくなき音読と暗唱でした。

『アメロ』には、プレゼンテーション(プレゼン)と呼ばれるpassageがあります。音読するのはもっぱらこのプレゼンです。で、わたしもさっそく始めました。まず、プレゼンの内容を理解をした上で、付属のテープを何千回と聴きました。音変化や音調を本文に書き込んだ後は、本文を舌の上に繰り返し乗せました。やがてテキストからは離れ、四六時中の暗唱を通して、『アメロ』を身体へたたき込みました。そんなことが半年間続いたでしょうか、すると全レッスンのプレゼンが口をついて出るようになったではありませんか。

現在、学力低下の声と相まって、音読等の繰り返し作業による骨格づくりの復権が叫ばれています。英語学習でも暗唱へと繋がる音読は回避されてきました。それは苦しいからです。でも、そのような苦闘を学習段階のどこかで経験せずして、「ある日突然英語をしゃべり出す」ことはありえません。『アメロ』が会話教本として戦後最大のロングセラーだということは、『アメロ』との「物語」を紡いだ人々がそれを次世代につなごうとしているからです。あなたはこの青い表紙の本と、どんな物語をつくれますか?

【ニュース専修5月号14面】